

報告：自然資源と食糧問題～国連・地球サミットRio+20会議から～¹ 〔2012年6月20日～22日 ブラジル リオ・デ・ジャネイロ〕

三宅良美

教育文化学部

Natural resource and food problems: a report from UN Summit Rio+20.

Yoshimi MIYAKE

1. イントロダクション

地球サミットとは、10年に1度、世界各国のリーダーが集まり、「持続可能な人間環境の発展」について議論する国連会議であり、今回はブラジルのリオデジャネイロで開催され、「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」と呼ばれた。リオ+20は、6月20日より6月22日まで、市の西南部にある大会議場 Rio Centro で行われた。ここでは首脳会談およびサイド・イベントのシンポジウム、記者会見が開かれていた。また、向かいの競技場（これがオリンピック競技場になる）では展示および会議が、市の東側に位置するコパカバーナ海岸沿いのフラミンゴ公園では一週間前から「ピープルズ・サミット」が開催されていた。私は、それぞれの会議場を往復、リオ+20、ピープルズ・サミット、そして「INES グローバル説明責任のための科学者・技術者国際ネットワーク」と「VDW: ドイツ科学者連盟」共催の二つのシンポジウム「持続可能な開発のための軍縮会議」(Disarmament for Sustainable Development)に参加した。

この国連会議の「sustainable 持続可能な」という表現は、ここ数年頻繁に使われる。持続可能な発展、開発、教育などなど。ということは、いままでは、持続可能ではない発展を地球はやっていた、ということか？このサブタイトルは、地球資源をこのまま、開発、発展と称して使い切ってしまったら将来がない、ということにやっと気づき、あえて「持続可能な」という形容詞を付け始めた

ということを示唆している。

56 ページにもおよぶ議定書は次のように始まった。

この会議において、私たちは、「この地球のために、経済、社会、そして環境の継続可能な未来を確約するための持続可能な開発への私たちのコミットメントを再び確認しあった。」

しかし、懸念されていたとおり、この大会議は具体案を出したり実質的な方法を発表したりという結果にはいたらなかった。もっとも、次の項目は即座に対応すべきこととして承認された。

1. climate change 気候変化
2. desertification 沿岸部砂漠化
3. fisheries depletion: 漁業収獲減少
4. pollution: 環境汚染
5. deforestation: 森林喪失
6. danger that thousands of species will go extinct: 数多くの動・植物種の絶滅

残念なことに次のトピックは後に持ち越させることとなった (Japan Times 2012.6.24)。

1. providing universal energy access 世界中の誰もがエネルギーにアクセスができること
2. doubling renewables by 2030. 2030年までに再生可能エネルギーを二倍にすること

¹ 今回の会議参加を援助してくれた日本科学者会議に心から感謝したい。

2. グリーン・エコノミー

「グリーン・エコノミーを可能にする大いなるグリーン・テクノロジーの形成」という考えが、今日地球生存の鍵として広く促進されつつある。今回の会議の大目標として、国連は、「グリーン・エコノミー」を提唱した。グリーン・エコノミーには、次の三つの基本的概念があると。

1. この地球の biosphere は有限のものであるから、今後の環境問題を考えると、持続可能のものにならなければならないこと。
2. 社会的に公正であること。多様な文化と人間の尊厳は自然資源と同じくらいに、損なってはならないものであるから。
3. 各地に根ざしたものであること。グリーン・エコノミーは、その地の生産、物品やサービスの交換を通してその地の人々の必要に見合うこと。

テクノロジーの面では、「グリーン・エコノミー」は、石油に替わって、バイオマス（牧草、森林の残留物、植物油、藻類など）を利用する産業を推進することである。その地の「自然を守る」という美しいことばを武器に侵入された村落、森林には大企業が入り込む。「グリーン・エコノミーは、グリード・エコノミーになるのではないか。」－多くの専門家たちは危惧しているという。

Rio + 20 は低調で、決して今後の環境会議のモデルといえたものではない。新しいものはなにもなく、これまでの会議に新しくペンキで上塗りしたものに過ぎないと批判されている。

3. 環境問題と食糧問題についての提案

いっぽうで、サイド・イベントのひとつとして開かれた「環境と軍縮のシンポジウム」での一連の発表は具体的な数字に基き、地球危機を訴えるものであった。ドイツの Joachim Spangenberg [スパンゲンベルグ氏] [Helmholtz Institute for Environmental Research, Department of Community and Ecology, Halle] は、地球温暖化がそのまま進めば 20 年以内に地球全体の温度は今から 4 度上昇してしまう

結果として、洪水などの自然災害が増え、環境が完全にバランスを崩してしまうということを主張した。

また、スイスの Angelika Hilbeck [ヒルベック氏] (Institute for Integrative Biology, ETF, Zurich)² は、農業は、新しい転換すなわち政府からのトップ・ダウンの指導のもとではなく、各農村のボトムアップからの農業形態であることが最も理想的であることを論じた。本報告書は、この、二人の発表に基づくものである。地球温暖化が地球の海面を上昇させるだけでなく、いかに全世界の食糧危機に、農業の崩壊に結びつくかを具体的な数字で示している。「資源」というキーワードをもつ新学部を開設するにあたり、本学はどのような姿勢をもって環境資源問題にかかわるべきかを考えたいと思う。

4. 地球温暖化と食糧危機の問題

スパンゲンベルグおよびヒルベックは、地球上の温度上昇に従い、世界の食糧、水、エコシステムに次のような影響が現れることを下記の表 1. 「気候の変化によるインパクト：食料・水・エコシステム」で示している。それによると、このまま温暖化が継続すれば、2060 年までに地上の温度は現在よりも 4 度上昇し、そのあかつきには、全世界の食料と水が枯渇する。

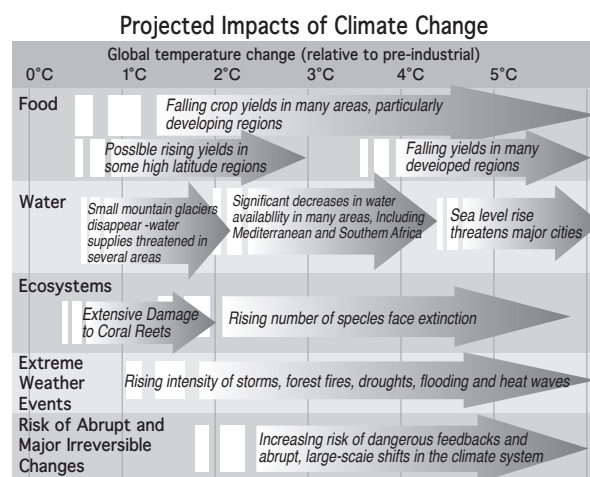


表 1. 気候の変化によるインパクト：食料・水・エコシステム (スパンゲンベルグ 2012)

現在の世界市場というのは、自然の過剰な搾取

² ヒルベックおよびスパンゲンベルグの両氏は会議後快く論文を提供してくれた。感謝したい。

と、そのやせ細る自然に依存している10億人もの貧困な人々、バランスを欠いた収入、システム、一方で、支配的な富裕層の経済バブル、その間に存在する信頼関係の欠如が連鎖しあっている状態である。従って、この自然の過剰搾取の度が過ぎて、なすすべをなくすと、地球全体で食糧危機問題が起きるというものである。この無秩序状態の世界市場に環境問題が悪化すると、一番最初の犠牲者になるのは、貧困にあえぐ人々である。

スパンゲンベルグおよびヒルベックは、世界の大企業が富をもとめて自然を利用している状況と、その自然に住まう貧困な人々とのアンバランスの関係を憂う。世界の食糧は、ヨーロッパおよびアメリカのメガ産業により支配されている。食糧をめぐる世界経済と第三世界で貧困にあえぐ人々、そして、自然資源の使用との関係は、下の図1のようなネットワーク構造になっている。

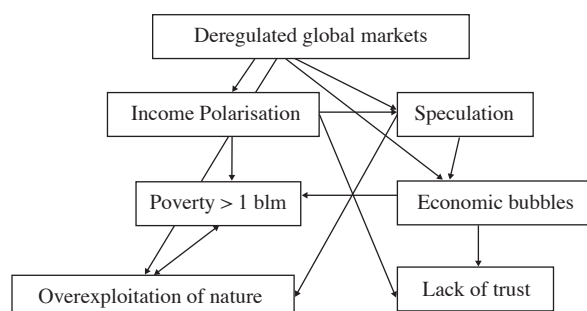


図1：世界市場・経済バブル・自然の過剰搾取（スパンゲンベルグ 2012）

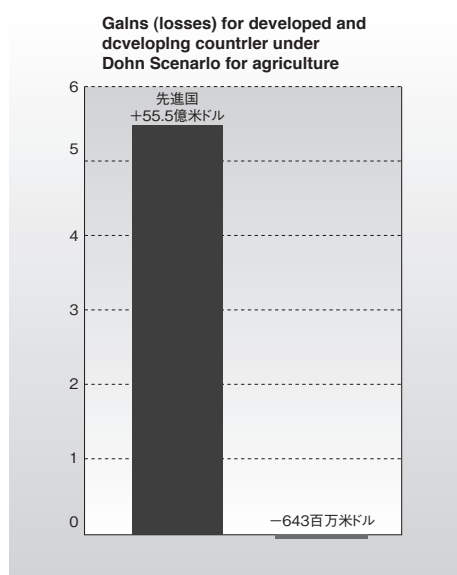


図2：先進国と開発途上国

ドーハ・シナリオ下の農業収入の変化：先進国と開発途上国とのギャップ。

ヒルベックは、地球温暖化による食糧危機を防ぐためには、上部構造からの指導ではなく、伝統をベースとしたエコシステム、それをめぐる文化とのバランスの上に立つ農業システムが今から必要であると主張する。今日の食糧生産は、図2・図3にあるように先進国の大企業、富裕国家（世界市場の73%をトップ10の企業が占める）が独占しているからである。この極端なアンバランスを正すことから始めなければならないという。

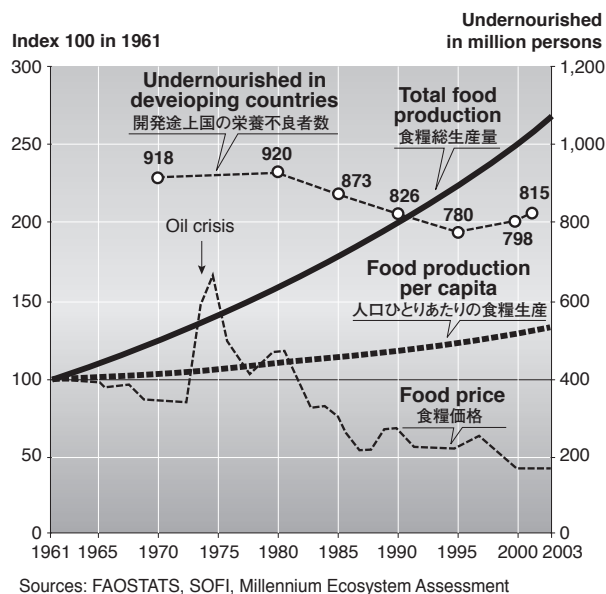


図3：食糧総生産・食糧価格・開発途上国における栄養不良（ヒルベック 2012より引用）

5. 結語

スパンゲンベルグとヒルベックのゴールは同じである。世界中の誰もが餓えることがあってはならないというものだ。スパンゲンベルグは、解決への道として、Fossil Energy から Renewable energy への移行を第一に上げ、2030年までに

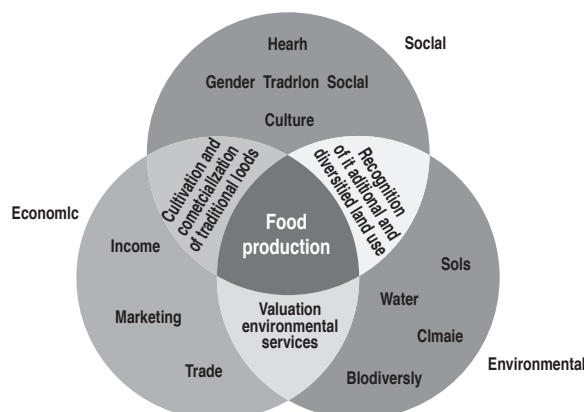


図4 社会、経済、環境（Hilbeck 2012）

Renewable Energy を現在の 2 倍にすることを提案している。これは、今回の会議の決議で見送られることになったことであることに注意したい。

一方、Food first! という姿勢を確固たるものとし、食糧問題に目を向けるヒルベックの提唱するものは、大企業の食糧経済支配から AgroEco 農業エコ を重視した、脱中心の多様な農業形態である。それは、一見ローテク、ローインプットの農業形態であるが、非合理的な伝統に縛られないものでなければならず、下記の図 4 に示されるとおり、社会・経済・環境の三つのサークルがバランスを保ち合っているモデルに基づいていなければならない。

参考文献：

Japan Times, June 24, 2012.

Hilbeck, Angelika, 2012, Paradigm shift in agricultural production inevitable. Presentation at the INES/VDW, side event at the UN Sustainable Development Conference. The Rio+20 Summir, Rio de Janeiro. June 21st, 2012.

Spangenberg, Joachim, Climate change, agriculture, biodiversity and water. Presentation at the INES/VDW, Side event at the UN Sustainable Development Conference. The Rio+20 Summir, Rio de Janeiro. June 21st, 2012.

三宅 良美 2012 「Rio+20：地球サミットからのレポート」『日本の科学者』47：48-51.